

4 デザインで紙の可能性を追求する



山田 明良
YAMADA Akiyoshi

かみの工作所 / 福永紙工株式会社 / 代表取締役

印刷関連業界ではペーパーレス化のあおりを受けて苦境に立たされている企業が多い。このような逆風のなか、独自の開発や取り組みによって紙に新たな可能性を見出すことができるのだろうか。新しい取り組みに挑戦している企業の事例を紹介する。

福永紙工とは

福永紙工株式会社は、東京都立川市に1963年に創業した印刷加工の製造会社です。業種的には「紙器製造業」に分類され、主に紙製のパッケージや紙製品の企画、設計、デザイン、印刷、加工、販売を生業としております。

2023年で60周年を迎える当社は、創業者の福永秀夫の手腕により多摩地域を中心に厚紙の印刷から加工まで一貫した設備と技術を持って高度成長期、バブル景気の波に乗って堅実に実績を積んできました。バブル崩壊後も、低成長ながらもそれまでの信頼関係を培ってきた取引先の下請け製造工場として、事業は継続しておりましたが2000年代に入り、デジタル化やペーパーレス化の波に翻弄されはじめ、徐々に売上高も下降してきました。紙業界や印刷業界も需要が減るなかでパイのシュリンクが始まり、さらにネット印刷の台頭により価格競争も激化して、中小の印刷会社の淘汰も始まりました。

私は結婚を機に妻の実家である福永紙工に1993年に入社し、業界の暗雲立ち込める2008年に創業者から代表者のバトンタッチをされました。これまで堅実



印刷加工の製造現場

に昭和の中小企業のお手本のような経営をしてきた当社をどう継続させるか、手腕を問われる訳です。

印刷や加工技術

当社では主に紙のパッケージ製造に関わる構造設計、DTP (Desk Top Publishing : パソコンでデータを作成する印刷物)、オフセット印刷、打抜き加工、貼り加工、箔押/エンボス加工、レーザーカット加工等の設備と技術を用いての一貫製造しております。

事業ベースとなる製造事業は、製紙会社あるいは紙問屋から用紙を購入して自社工場にて断裁→



パッケージの構造設計

オフセット印刷→印刷したシートを専用の金型を用いて打抜き加工→パッケージ等の糊貼り加工による製箱や、特殊な装飾的な加工として箔押/エンボス加工や繊細なカットを施すレーザーカット加工等を行っております。印刷加工の前段階として印刷データの作成(デザイン、レイアウト、写真撮影、編集作業、DTP作業など)やパッケージなどの図面の構造設計、機能設計なども行います。

紙の機能とパッケージ

商業印刷に用いられる紙は、一般的な商業用紙として書籍、新聞、チラシ、カレンダーなど印刷

適正がある「薄い紙」と包装資材や段ボールに用いられる「厚い紙」、ティッシュペーパーや紙オムツなどに用いられる「機能紙」とに大別されます。当社では主に食料品、化粧品、生活用品、文房具、機械部品などあらゆる製品の紙製パッケージ、書籍やファイルの表紙、発送用ケース、紙什器、紙雑貨など「厚い紙」を用いた紙製品に特化して事業展開をしております。

デザインプロジェクト「かみの工作所」

2006年よりデザイナーとの協働プロジェクト「かみの工作所」を発足させました。それまでの製造のノウハウをベースに自由で斬新なデザイナーの発想を融合させ、工場発の主体的な紙製品の開発、製造さらにファクトリーブランドとして小さなメーカー機能を持ち、「販売」というトライアルもはじめました。

2000年代の紙や印刷業界のシュリンクの不安に伴い、中小企業が独自に差異性を発揮して事業を継続するにはどうしたらよいかと考えた時、いっしょに「デザイン」というイメージが浮かびました。それまでは下請けの受注で十分な仕事量を確保できていたので、デザインやクリエイティブな要素は



「かみの工作所」製品

全くありませんでした。それが仕事量の減退により当社のオリジナル性、主体的に製品の企画や開発をすることへの意味を見出しました。また前職のアパレル会社でのファッションデザインや卸売販売に関わっていたため、販売のノウハウやアート、デザインに精通しており、その可能性を信じることができました。

具体的には複数のデザイナーを工場に招き、今ある機械設備と製造技術をクリエイターの視点で見てもらい、そこから新しい紙製品のデザインを発想してもらいました。デザイナーからの斬新なアイデアや提案を工場の片隅で「紙の実験室」のような形で試作して、少しずつ製品化してみました。本業になるべく負担をかけず、今ある設備と技術を用いたスモールスタートを試みました。そのデザインの取り組みを「かみの工作所」と名づけ、小さな展示会を試験的に催した結果、デザイン系メディアやクリエイターから良好な反応が得られ、本格的にオリジナル紙製品のデザイン開発と販売を、事業として立ち上げる決断をしました。

コミュニケーションツールとしての紙

紙製品のデザインという一般にはノートやカレンダーなどのグラフィック表現をイメージしますが、「かみの工作所」では「紙の可能性を追求する」をコンセプトに、今まで見たこともないアートに近いコンテンポラリーな紙製品をリリースしました。卸売販売のターゲットとして、世界中のミュージアムショップで販売されるようなものをイメージし、2009年にデザイン製品に特化した国際見本市「イ



展示会風景 / かみの重力展 @ 六本木 AXIS

ンテリアライフスタイル」に出展し、多くのデザイン関係者にアプローチすることができました。その結果、ニューヨーク近代美術館MoMAをはじめ金沢21世紀美術館、森美術館、国立新美術館などのミュージアムショップからのオーダーをいただくことができました。

これまでの紙製品は用途や機能を持ち、大量生産、大量消費され「使い捨て」のイメージが一般的です。しかし「かみの工作所」プロジェクトではアートやデザインの好きな人に向けて「収集する」「工作する」「プレゼントする」といった紙の楽しみ方を提案する試みでもあり、ニッチなビジネスモデルとも言えます。それはまた「必需品ではないが必要なもの」という人の心への癒し、コミュニケーションツールとしての紙の新しい機能を発見、再構築する取り組みでもありと考えております。



「空気の器」by minä perhonen



「テラダモケイ」1/100 建築模型用添景セットシリーズ工事現場編



gu-pa 「TOP TO TAIL」



直営新店舗「SUPER PAPER MARKET」

オリジナル製品とその展開

現在までに、あらゆるジャンルのクリエイターとフラットな関係で「紙」の可能性を追求したプロジェクトには、トラフ建築設計事務所と「空気の器」、デザイナー寺田尚樹氏との協働プロジェクトで「テラダモケイ」、アーティスト鈴木康広氏と「MABATAKI NOTE」、ペーパークラフト作家和田恭侑氏と「gu-pa」、デザイナー安積朋子氏と「1:16 one to sixteen」、漫画家 井上雄彦氏と「イノウエバッジ店」、デザイナー岡崎智弘氏と「紙工視点」があります。

これまで15年間に試行錯誤を繰り返し、紙とこれからの中小企業とデザインの「新たな視点」を模索し挑戦し続けています。

また、2021年4月より地元、立川の複合施設 GREEN SPRINGSにて直営新店舗「SUPER PAPER MARKET」をオープンしました。

新たな取り組み「UNBOX」

2020年9月よりB to B (Business to Business) 向けに立ち上げた「UNBOX」は、紙の構造設計の専門家としての当社が中心となり、多彩なメーカーやクリエイターとのコラボレーションを通じて豊かな体験を生み出す「新しい箱」を開発してゆくプロジェクトです。

意匠としてのパッケージデザインの提案だけで



箱を、再発明する「UNBOX」プロジェクト

はなく、構造に着目した紙の箱の「最適化」を目指したプロジェクトです。これまでの紙、印刷、加工の大量生産、大量消費、使い捨ての概念とは異なるベクトルで紙パッケージの意味を捉え、デザインやライフスタイルを意識した商品やこだわりのある販売店、メーカーに対し、商品パッケージや配送箱などの包装資材にもデザインや環境への配慮の必要性を提言する取り組みです。

また、最終消費者が手に取った時に過剰包装ではない、美しく「最適化」されたことに気づけるパッケージにより、企業や作り手の取り組み姿勢が伝わることを目的としています。このプロジェクトも「デザインで紙の可能性を追求する」というテーマが継承されており、サステナブルな紙のあり方を追求した挑戦でもあります。